特集　リスニング力

リスニング力を高めるために 1

――理論と実践――

早稲田大学　中野 美知子

1. リスニング力とは何か、なぜ大切か

コミュニケーション志向で、発信型の英語教育が大切であることは、学生も教師も実感している。文部科学省も「英語が使える日本人」育成のための戦略プランを出しているように、英語は世界の「共通語」として広く認識され、必要性を肌で感じるようになってきている。これは、現実に、日本の大学卒業生が欧米のみならずアジアの各地で英語によるビジネスをし、生活をするようになってきていることを反映しているからであろう。しかも、日本以外のアジア諸国では、少なくとも小学校3年生から英語を教えている。一方で、TOEICやTOEFLの点数の世界各国の比較が発表されると、外国語として英語を習っている（EFL）中国や韓国の学生よりも、同じEFLの日本の学生の点数は愕然とするほど低いことがわかる。日本の場合、TOEFLやTOEICの受験人口はどこよりも多いので、平均点が低いことが、すなわち日本人の英語力の低さを証明していることにはならないが、英語力のないことはどうも事実のようである。

実際の対面のコミュニケーションの場面を考えれば、リスニング力の大切さは明らかである。相手の言っていることが聞き取れなければ、会話は成り立たないし、交渉もできない。人と人との対面コミュニケーションの場合ばかりでなく、英語による授業、映画や講演会、TV番組の理解、場内アナウンスなど、リスニング力がなければ、十分な情報が得られず、飛行機に乗りそこなうことさえある。このように、『英語が使える日本人』になるためには、リスニング力は不可欠である。

では、リスニング力とは何か、であるが、私たちは英語をEFLとして習っているということと、母国語の影響という観点から、以下の4つの項目が含まれる。

①子音と母音の数、配列順序が日本語と異なっていることに注意が必要。日本語に欠如しているものには、音響イメージが固定するまで学習させること。教師として必要な知識はSegmental Phoneticsの分野だが、リスニングのときのボトムアップ処理に必要であるので、この分野の教授力が不可欠である。

②英語はstress-timedだが、日本語はmora-timedなので、stress-timedによる発話の特徴を簡単に理解していることが望ましい。

③イントネーションの理解

④発話の順序のスキーマや内容スキーマ、場面スキーマは、リスニング時のトップダウン処理に役立つので、簡潔に理解していることが望ましい。

ここでは以上4つの学習材料について簡単に解説し、その他⑤学習過程と⑥学習者への配慮をまとめる。

2. 教育現場でリスニング力をつけるには：教科書・教材

4種の教育項目①～④のうち、教科書であれば特別なコーナーを2箇所くらい設けて、集中的に教えることができるのは、②と③である。①と④は教科書に準じて、その都度教えることができる。ただし、①については、教科書のどこかに母音や子音をまとめて、発音記号とともに提示しておくことが望ましい。

①Segmental Phoneticsをどこまで教えるか?

発音記号を試験の問題にすることは避けたいが、発音記号を学生が理解していることは重要である。日本語にない音を記号もなく記憶することが可能かという問題である。私が中学生や高校生だったとき、教科書のどこかにまとめて発音記号と口の形や、音声学でよく出てくる空気の流れが顔の断面図とともに提示されていた。発音記号は試験には出なかったが、先生が日本語の「ふ」と英語の/f/の違いや「ぶ」と/v/の違いを発音してくれるとき、発音記号と図解説明が役立ったことを記憶している。新単語は発音をしながら何度も筆記し、図解説明を見ながら授業中の先生の説明を思い出し復習をした。このプロセスで、英語の子音や母音の音響イメージが形成されたと思う。当時は現在よりも英語はEFLであり、日常で使用されていない音声を記憶するには、発音記号に頼らなければならなかった。しかし、現在でも英語と日本語の音声の違いは変わっていないのであるから、発音記号は音声の記憶を助けることになると思う。試験問題に発音記号を出さないで、発音記号は授業中や教科書で利用するという方法である。

さて、どこまで教えるか、専門家の間でも2種類の考え方がある。最初の引用はギムソンの意見をまとめたもので、2番目の引用は、英語が「国際語」になった今、あまり重要でない子音や、EFLやESLの人たちに難解すぎるものは排除しようというジェンキンズの意見をまとめたものである。

- ❖All consonants except /hw/
- ❖Six short monophthongs:/I/, /ɛ/, /a/, /ɒ/, /ʊ/, /ə/
- ❖Seven long monophthongs:/iː/, /eː/, /ɑː/, /ɔː/, /oː/, /uː/, /əː/
- ❖Three diphthongs:/aɪ/, /aʊ/, /ɔɪ/
- ❖Quality

(Gimson, 2001, p.310)

- ❖All consonantal phonemes except /θ/, /ð/, /ɫ/, /ɹ/ (Exclude voiceless dental fricative, voiced dental fricative, voiced alveolar lateral approximant (dark l), voiced retroflex approximant)
- ❖Allophones of unvoiced consonants (/p, t, k/) by the distinction of aspiration
- ❖Long-short contrast (quantity) of vowels
- ❖Diphthongs /aʊ/, /aɪ/, /ɔɪ/
- ❖/ɜː/ (not to confuse it with /ɑː/)

(Jenkins, 2001, pp.136-146)

ギムソンとジェンキンズの大きな違いは、ジェンキンズは「/θ/, /ð/, /ʊ/, /ɒ/, /ɹ/は教えないでよい。また、長母音と短母音は長さの違いだけでよく、質の違いは教えないでよい」と言っていることだ。ここでは、紙面の都合もあり、詳しく述べることはできないが、筆者はこれらの意見に子音については賛成で、母音については質もある程度マスターしたほうがよいと思っている。練習としては、単語を発音するときに強勢の位置（Word Stress）の指導も重要である。まとめると以下のようになる。（表を参照のこと。）

- ❖発音できれば聞き取れることを納得させる。新しい単語を辞書で引かせ、発音記号がわかっていれば発音できることを実感させる。
- ❖有声音と無声音：のどに手をあてて声帯の振動を感じさせ、その違いに注意させる。
- ❖音声は口のどこ（Place）で発音されるか（調音点）、どんな方法（Manner）で発音されるか（調音法）で分類されていることを理解させる。

	両　唇	唇　歯	歯	歯　茎	硬口蓋 歯　茎	硬口蓋	軟口蓋	声　門
閉鎖音	pb			td			k g	
摩擦音		fv	θð	sz	ʃ ʒ			h
破摩音					tʃ dʒ			
鼻　音	m			n			ŋ	
側　音				l				
半母音				r		y	w	

（1）Place：唇、唇と歯、歯、歯茎、口の奥というように簡単に指導する
（2）調音法の種類
❖音を止める（閉鎖音）p t k b d g
❖音を摩擦させる（摩擦音）s z f v ʃ ʒ θ ð h
❖音を止めながら摩擦(破擦音) dʒ tʃ
❖息を鼻から出す（鼻音）m n ŋ
❖舌の両横を息が通るように（側音）l
❖子音ではあるが母音の特徴も持つ（半母音）r y w

今後、アジア人の英語も聞き分ける機会が増えてくると思うが、多少の発音上のヴァリエーションは基本的な音響イメージがあれば、短時間で耳が慣れてくることが経験上主張できる。

②英語はstress-timedなので、そこから生じる日本語との差異について

英語では強勢と強勢の間が等間隔で発音されるので、リズムが生まれてくる。そのために、音が脱落したり、連結したり、同化する現象がおきるので、例を示しながら練習させる。

a）音の脱落
1）/p, b, t, d, k, g/が、語尾、句末、文末にきたとき、他の子音と連続する場合、音が聞こえない場合がある
例 ste(p) child
2）同じ子音が連続するとき
例 boo(k) case, poli(ce) station
3）アクセントのつかない音節の母音が弱くなり、聞こえないとき
例 (A)merican
4）he, his, him, herの/h/や、they, their, themの/ð/が聞こえないときがある
例 when (h)e said
例 and (th)ey went home

b）音の連結
1）2つの単語がつながって、発音される
例 Good afternoon, Good evening
2）語の終わりの/r/が次に来る単語とつながることが多い
例 Cheer up.

c）音の同化
1）語末の子音が、次の単語の語頭の/j/と同化して、音が変化したり、無声化する。/j/ばかりではないので、慣れが必要。
例 I won't let you do that.（/t+j/=/tʃ/）
例 Did you eat your lunch?（/d+j/=/dʒ/）
例 Help me.（pが無声化する）
2）助動詞や動詞にtoが続くとき
例 going to → gonna
（書き言葉では使わない方がよい）
例 want to → wanna
（書き言葉では使わない方がよい）
例 have to → hafta
（書き言葉では使わない方がよい）
例 used to → useta
（書き言葉では使わない方がよい）

短縮形も聞き取りがむずかしい場合もあるので、4回くらいにまとめて教えることをお勧めする。

❖I am → I'm, You are → You're, He is (has) → He's, 固有名詞＋is → Mary'sなど
❖We are (were) → We're, They are (were) → They're
❖Who is (has) → Who's, What is (has) → What's, When is → When's
❖I will → I'll
（we, you, he, she, theyも同様）
❖I have → I've
（その他の人称代名詞でも同様）
❖You would → You'd
（その他の人称代名詞でも同様）
❖You had → You'd
（その他の人称代名詞でも同様）
❖must have → must've, should have → should've, could have → could've
❖do not → don't, does not → doesn't, did not → didn't, cannot → can't, could not → couldn't, should not → shouldn't, will not → won't, would not → wouldn't

③イントネーション

文型との関係で、一般的なパターンを教え、学生が混乱するような事例は避ける。

1）下降調：平叙文、命令文、感嘆文、Wh-疑問文
2）上昇調：Yes-Noで答える疑問文、丁寧な命令文（例 Would you like to take him out (↗)？）その他、平叙文でも上昇調を使うときは（例 'It isn't so nice (↗).' 'It isn't bad (↗).'）強く主張しないで、そうでもないことを言っている。また、平叙文の文型でも、上昇調で言うと、疑問文の意味になる。
3）下降 (↘)＋上昇 (↗)：付加疑問文（相手の同意を求める）
You are good at math (↘), aren't you (↗)？
4）上昇 (↗)＋下降 (↘)：選択疑問文、付加疑問文
Which would you like (↗), tea or coffee (↘)？
You are a good student (↗), aren't you (↘)？
5）下降 (↘)＋下降 (↘)：複文，重文
If it rains (↘), we won't go (↘).
When we get to the station (↘), let's take some rest (↘).
We are very tired (↘), but tried not to look like that (↘).

イントネーションに関係して、**文強勢（Sentence Stress）**も注意する。重要な意味を担う**「内容語」**に強勢がおかれ、話者が強調したい内容（話者が「聞き手は知っていないと判断した」聞き手にとって新しい情報や、単に強調したい単語や対比させたい単語）に強勢がおかれる。次の例では、太郎は花子が昨日どこに行っているか知らない。花子は太郎が知らない情報である 'Tokyo' に強勢をおいて発音する。このような場合が文強勢である。

Taro: Where did you go yesterday?
Hanako: I went to Tokyo yesterday.

④スキーマ

会話文には必ず、状況や場面が付帯しているものであり、登場人物の関係は会話の中身により類推される。会話文を教えるとき、状況と場面をスキーマとして習うと、リスニングのとき、トップダウン処理を利用することができる。たとえば、食堂という場面であれば、ウエイトレスが注文を聞き、客は注文するという順序が決まっている。ウエイトレスが注文を聞くとき、大概飲み物をまず聞き、食事は何にするか聞く。このような物事の順序と文型の知識・単語の知識のことを状況スキーマという。場面が理解でき、物事の順序と文型・単語の知識がリスニングに役立つことはこの例で理解できる。だから、ReadingでもWritingでも、場面、状況、登場人物の関係と文型・単語、ジャンルの知識といったフォーマルスキーマとあわせて理解させておくことが望ましい。スキーマと独立しているのは**「数え方」「日時」「年号」「電話番号」「基数」「分数」「足し算」「引き算」「掛け算」「グラフの読み方」**で、これはスキーマと関係させないで、教科書に出てくるたびに、何回も練習させる。

⑤学習過程

文型・単語を含むさまざまなスキーマや音響イメージが**定着**し、**自動化する**ことで、リスニング能力もついたことになる。このような言語知識の定着と自動化はリスニングのみならず、スピーキングや読解力にも応用されていく。ここで主張したいのは、総合的にスキルが組み合わさって効果的な英語教育となっていくということだ。

⑥学習者への配慮

定着と自動化へのプロセスには、2種類あると言われている。多くの事例に触れることで定着と自動化が起こるタイプ、同じ典型例を何回も学習することで定着と自動化が促進されるタイプがある。教師は自分の学生がどちらのタイプであるか判断し、学習法を指導すべきである。教科書は場面の典型例を掲載すべきであると思う。後者のタイプに属する学習者は良い教科書を徹底的に学習すれば、実力がつき、応用力も伸ばすことができる。

3. ALTとITの活用の仕方

ALTはいろいろな国の母語話者がいるが、これは英語が「国際語」になっている現代では望ましいことである。ALTがいることで、authentic interpersonal relationshipsを保ちながら、

exposureを高めることが大切だ。聞けば聞くほど、日本語の音声認識が減少し、さまざまな英語に対するリスニング力はついていく。私の勤務する早稲田大学ではアジア地域の学生とインターネットを介してテレビ会議で討論している。学生は初めのうち、中国人の英語や韓国の人たちの英語に訛りがあって、聞き取りにくいという。しかし、半期くらいで慣れてくる。このように、実際に英語をコミュニケーションの道具として使う機会を与えれば与えるほど、実践力がつき、リスニング力も伸びてくる。テレビ会議システムがなければ、音声チャットもできる。CALLでマシーンと対話しているような状況よりも、生身の人間と交流することが現在のテクノロジーでは可能なのであるから、ITは活用すべきである。また、VOAやBBCでも、EFLの学生を意識した「ゆっくり話している」教材をダウンロードでき、学生に聞かせたり、先生方のホームページで紹介すると、やる気のある生徒には刺激になる。Googleで検索すれば、世界中からフリーの教材が手に入ることも忘れてはいけない。

音読と**シャドーウィング**が最近では推奨されている。この活動は学生からも評判がよいので、発音やイントネーション、単語強勢・文強勢、短縮形、音と脱落、同化、リンキングの学習を念頭に、シャドーイングさせたり、音読させることは効果的だという実践報告がいくつもある。リスニング力は4技能統合させた形で教育し、セクション2でまとめたことを学生たちの言語知識として定着させ、自動化していくように教育していただきたい。